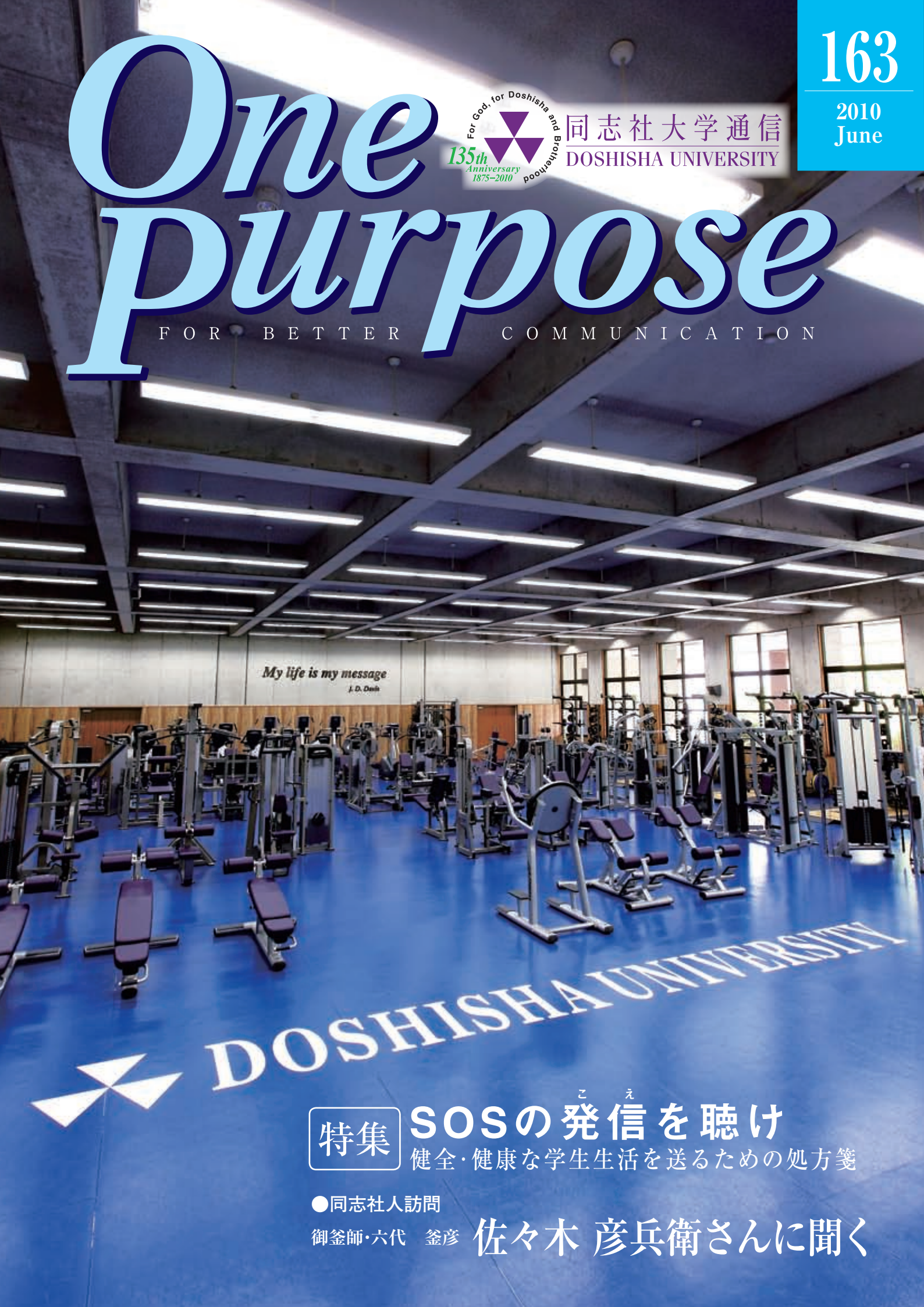
One Purpose

FOR BETTER COMMUNICATION

163
2010 June

For God, for Doshisha and Brotherhood
135th Anniversary 1875–2010

同志社大学通信
DOSHISHA UNIVERSITY



特集 SOSの発信(こえ)を聴け
健全・健康な学生生活を送るための処方箋

●同志社人訪問
御釜師・六代　釜彦　佐々木 彦兵衛さんに聞く

CONTENTS

2010 JUNE No.163

『ONE PURPOSE』は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションをはかることを目的として発行しています。
ささいなことでも結構ですので、どしどし広報課までご意見・情報をお寄せください。

※今号に登場する学生の学年は取材時によるものです。

特 集・座談会

SOSの発信を聴け

健全･健康な学生生活を送るための処方箋 …… 2

ゼミ探訪 学びの時間 …… 7
文学部　工藤和男ゼミ

同志社の研究は今 …… 9
高等教育･学生研究センター　山田礼子 社会学部教授

データでみる同大生の2009年度就職戦線 …… 11

2010年度　大学予算について …… 11

CAMPUS NEWS …… 15
2011年度､新学部と同志社国際学院を開設／司法研究科･法学研究科とウィスコンシン大学ロースクール｢単位互換プログラム｣協定締結／同志社総長賞表彰式／文化系公認団体祝賀会および表彰式／2009年度同志社ローム記念館大賞発表会開催／経済学部･新関ゼミ 日経STOCKリーグ審査委員特別賞受賞／同志社大学新用地のキャンパス名称決定！／同志社大学の募金事業／同志社創立135周年記念フォトコンテスト／Neesima Room 第37 回企画展／本学教員執筆図書紹介

留学生紹介 …… 19
フリオ･ペレスさん(京都アメリカ大学コンソーシアム)

INTERVIEW　～同志社人訪問～ …… 20
御釜師･六代　釜彦　佐々木 彦兵衛さんに聞く

MY JOB, MY LIFE　～シリーズ 私と｢仕事｣～ …… 23
･三浦 忠広さん(2002年神学部卒業)
･大野 真理子さん(2006年工学研究科機械工学専攻博士課程(前期課程)修了)

MY PURPOSE …… 27
7人制ラグビーの世界大会に日本代表として出場～目標は2016年リオデジャネイロ五輪～
正海 智大さん〈法学部政治学科3年次生〉

ANNOUNCEMENT …… 25

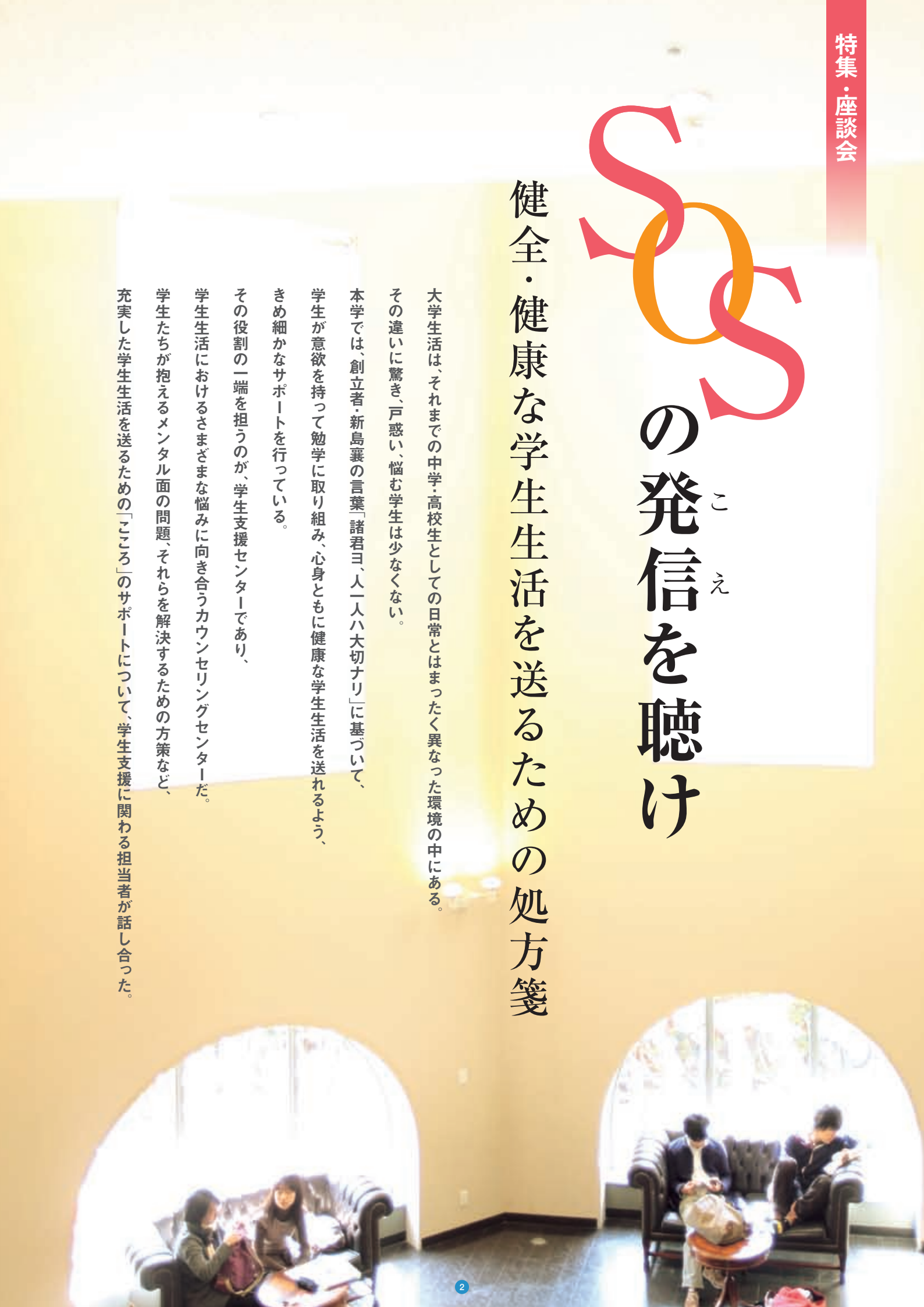
表紙の情景［デイヴィス記念館トレーニングルーム］

2010年4月､デイヴィス記念館地階トレーニングルームは､学生､教職員が広く利用できるだけでなく､健康とスポーツを専門的立場から扱う学部を有する大学としてもふさわしい施設に生まれ変わった｡有酸素系マシン21台､ケーブル系マシン28台､フリーウェイトラック9台､測定機器その他を新たに備え､初心者から上級者まで幅広いユーザに対応できるバランス型のトレーニングルームとなっている｡正課授業での利用の他､本学の学生､教職員等であれば､安全面や使用方法に関する利用者講習を受講した上で利用することができ､専属のスポーツトレーナーの助言を受けることも可能である。

SOSの発信（こえ）を聴け

健全・健康な学生生活を送るための処方箋

大学生活は、それまでの中学・高校生としての日常とはまったく異なった環境の中にある。
その違いに驚き、戸惑い、悩む学生は少なくない。
本学では、創立者・新島襄の言葉「諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ」に基づいて、
学生が意欲を持って勉学に取り組み、心身ともに健康な学生生活を送れるよう、
きめ細かなサポートを行っている。
その役割の一端を担うのが、学生支援センターであり、
学生生活におけるさまざまな悩みに向き合うカウンセリングセンターだ。
学生たちが抱えるメンタル面の問題、それらを解決するための方策など、
充実した学生生活を送るための「こころ」のサポートについて、学生支援に関わる担当者が話し合った。



写真左から　車戸明子(カウンセリングセンター学生相談カウンセラー)、佐藤豪教授(心理学部)、真銅正宏教授(学生支援センター所長、カウンセリングセンター所長)、大亦祐子(京田辺校地学生支援課学生支援係長)

学部・学科選択における迷い

真銅●現在、学生はメンタル面で多くの悩みを抱えています。これまでさまざまな学生の相談に関わってこられた車戸さん、大亦さん、心理学の分野から佐藤先生にお話をいただき、心身ともに健康な学生生活を送るための学生支援の在り方について考えていきたいと思います。まず車戸さんからカウンセリングセンターの紹介を含めて近年の傾向を教えてください。

車戸●本学のカウンセリングセンターは歴史が古く、1957年から学生相談所として始まっています。その後社会情勢に合わせて整備され、最も大きな変革が昨年度、学生支援センターから独立してカウンセリングセンターとなったことです。カウンセリングセンターは学生生活を円滑に過ごすための"よろず相談所"として位置づけられています。どんな相談でも受け付けますから、内容も幅広く、精神的に重篤な問題を抱えて来る学生もあれば、日常生活レベルの相談で気軽に来る学生もいます。近年の傾向で言えば、ここ1、2年、ご家族の方が相談に来られるケースが増えてきています。さらに、すでに医療的ケアを受けている人が利用するケースも増えています。

真銅●低学年次生のサポートに関わっておられる大亦さんは、特に1・2年次生についてお感じになることはありますか。

大亦●入学してすぐに転学部・転学科したいという相談をしてくる学生がいます。転学部・転学科の希望は学年に関係ないことかもしれませんが、1・2年次生に特に多いですね。これは、進学するときに受験科目で選んだとか、高校の先生に君はこの学部にしておきなさいと言われて選んだとか、きちんと選択してこなかった結果だと思います。それでいざ入ってみると思っていたのとは違うと悩みを訴えて来るのです。

真銅●同志社大学はずっと6学部だったのが、ここ数年で12学部、倍に増えました。その影響もあるのでしょうか。

大亦●名称から学問の内容がイメージしづらく、こうだと思い込んで入ったけれど、入ってみたら違ったと訴える学生もいますね。本人もきちんと調べたわけではなく、何となく学部名でこんなことができるのではないかと安易に決めてしまったと自覚があり、実際に授業を受けると思っていたことと違うと気づくパターンがあるようです。

自分を探し、居場所を探す

真銅●私も授業を持っていて感じるのですが、昔はクラブやサークルに没頭して授業に出てこない学生が結構目立ったのですが、今は出席だけはするという学生が多い。大学に居場所がないと感じているような傾向はありますか。

大亦●京田辺校地の場合、キャンパスが広いので投げ出されたような感じを受ける学生は多いと思います。人が多くて圧倒されましたといって、入学式の翌日にオロオ

ロしている学生がいるのです。「大丈夫？」と声をかけると、ホッとして泣き出す。高校までの担任制があったものとは違うので、クラブやサークル、小クラスなど何かに属さないとたちまち不安を感じる人が多いのかなと思います。

真銅●佐藤先生は心理学部の教授としてご専門の面から最近何かお感じになることはありますか。

佐藤●少し前までは中学校や高校での親密な人間関係があったと思います。生徒同士の距離が近く、先生と生徒とも親密な交流があり、その中でお互いに自分をぶつけ合ってそのプロセスの中で大人になっていく過程があったように思います。しかしそういった人間関係が次第に少なくなったために自分自身を形成するということがうまくできないまま大学に入ってしまうことが多くなっているのではないかと思います。思春期から青年期は自分自身のありかたに悩むことが多く、そんな時友人関係の中で自分を模索してゆくというプロセスが大切なのだろうと思います。

大亦●学生支援センターでは学生が小グループで活動するプログラムが多いのですが、確かに最近は友達に厳しいことを言う学生は少なくなっています。褒めることは上手なのに、いい意味で苦言を呈することが苦手。フィードバックを受け止められずに傷ついてしまう人も多いです。

佐藤●例えば親や先生から叱られるという経験が乏しいのかもしれません。叱ることを奨励しているということでは決してありませんが、してはいけないことをきちんと伝えること、そしてそれを受け止めて守るという訓練も必要なことだと思います。その中で自分と向き合い、自分の心をコントロールする術を学ぶというのも成長してゆく一面としては大切なことです。そんな中でどのように自己主張をするかも学んでゆくものだと思います。そこから社会に出ていく強さを見つける必要もあるだろうと思います。

車戸●ちょっと違うかもしれませんが、厳しいことを言えないという点で、最近男女の恋愛関係でうまく別れられなくて困っているという相談が目立つようになってきました。自分の気持ちをはっきりと表現できず、あいまいな返事をすることで、膠着状態に陥ってしまうのです。また、友達同士でも回答が見出せず、お互いの意見を近づけていくという話し合いがうまくできない様子も伺えます。

真銅●カウンセリングセンターが恋愛問題まで関わるということは、本当に相談内容の幅が広いと感じるのですが、対応しきれないような問題はありますか。

車戸●触法、つまり法に触れる行為を犯したケースや発達障害については違ったアプローチを考えないといけないと思っていますが、恋愛問題など入り口は何であれ、私たちができることはその人たちに寄り添っていくことなので、どんな問題であってもベースになるのは同じだと思っています。

先生との距離感が掴めない

真銅●学修面で学部、あるいは授業やゼミについて相談はありますか。

大亦●授業についていけないとか、単位が足りずに留年が決まったとかいう相談も受けます。最近は就職が厳しいのでとりあえず大学院に行くという人が、研究には特に興味がないまま進学したために、論文が書けないで困ったり、指導教授とうまくコミュニケーションがとれないと相談に来る大学院生も増えてきているように思います。

真銅●そんな場合、佐藤先生ならどういうアドバイスをされるのか、あるいは私たちはどういうアドバイスをしていけばいいのでしょう。

佐藤●心理学部でも大学院生がいますが、その人たちにはまず研究室に来なさいと言います。中には就職モラトリアムのような形で入ってくる学生もいるのですが、それならそれでまず先生とコミュニケーションを取ることが一番だと思うのですね。それを抜きにしては、特に大学院生の場合は成り立たない。自分から話に来ることができない学生もいますから、私たち教員の側も話せるチャンスを作らないといけません。またそのような話し合いの中で、学生が研究のおもしろさに目覚めてゆくというのも良くあることで、結局は研究者になったという例も何人かあります。いわばコミュニケーションの過程の中での自己発見ということになるでしょうか。

大亦●先生との距離感をどう取っていいのかわからない学生が目立ちます。「先生に質問に行ってみてはどう」とアドバイスをしたときに、「質問していいんですか」と聞かれたこともあります。特に大教室の授業など、物理的にも心理的にも距離も感じているようです。身近に相談できる先生がいないという1・2年次生は多いと思います。

真銅●確かに相談相手として身近な先生がいるというのは、学修面においても非常にいいサポートになると思いますね。現在、学生支援センターには「ぴあアドバイザー」

「ぴあメンター」という形で上級生が下級生をサポートする仕組みがありますが、これらはうまくいっているのでしょうか。

大亦●「ぴあアドバイザー」はオリエンテーション期間中に、新入生の科目登録に関する相談や学生生活に関する総合案内を行う学生相談員です。新入生はまずどこに行けばいいのかわからない、誰に何を聞いていいのかわからないという状態なので、キャンパスのブースで気軽に相談できるというメリットがあります。実際に学生生活を送っている先輩から生の情報が入るし、トレーニングを受けたスタッフなのでとても親身になって新入生たちの相談を受け止めています。「ぴあメンター」は先輩の立場から、自らの経験を踏まえて後輩の相談に応じる学生相談員です。開講期間中の週1コマ、京田辺校地学生支援課のラウンジで、留学や海外ボランティアといった特定の分野の質問に応じてもらっています。特に京田辺校地の1・2年次生で3・4年次生が今出川校地にいる学部の場合は、クラブにでも入っていれば別ですが、体験者から話を聞く機会が少ない。そういう学生にとっては、例えば転学部・転学科についても、その経験のある先輩から、実際の体験談を聞けるのです。先輩側も安易に勧めるのではなく、自分が苦労した体験やどういう気持ちで転学部・転学科に至ったかを親身に話しますので、非常にいい制度だと思います。話す側の上級生も下級生に対して役に立てたことが大きな自信になり、次に何かをするきっかけになっています。

「何でも相談」とカウンセリングの連携

真銅●学生支援センターの「何でも相談」とカウンセリングセンター、学生の相談窓口として2つのものがありますが、両者の連携についてはいかがでしょう。

大亦●京田辺校地学生支援課の中に、私が担当する「何でも相談」の係があるのですが、そこには心理的な問題を抱えた学生も、発達障害が疑わしい学生も来ます。そして専門的なサポートが必要と判断した時には、カウンセリングセンターや保健センター等と連携しながら対応しています。

車戸●カウンセリングセンターの相談件数は、京田辺校地では実数も延べ数も少なくなっています。これは「何でも相談」がとても有効に働いていることの結果だと感じています。「何でも相談」からカウンセリングセンターに相談に来るケースはかなり多いですし、逆にこちらへ気軽に留学の相談に来る学生もいます。大亦さんのところで対応しながらポイント的にカウンセリングセンターが入ったり、学部の先生に入っていただいたり、そういう連携は行っていますし、それをより進めていくことがこれからの大きな課題だと思っています。

真銅●発達障害の学生のケアは大学にとって重要なテーマです。また昨今、大麻など本学に限らず大学生をめぐる事象が大きな社会問題として取り上げられています。こうした点について、学生をサポートする我々としてどういう態度、方策が必要なのかということについて議論したいと思うのですが。

車戸●いずれもなかなか難しい問題で、これがベストという回答はカウンセリングセンターでも得られていないのですが、特に発達障害に関しては、一人ひとりで必要な対応が違ってきますから、個別対応ということがものすごく重要になって来ます。触法の問題についても、再発防止のための更生プログラムを大学内で実施するのは難しい。やはり底辺からのことになりますが、先生方が個別に声をかけてくださる、あるいは先生に限らず学部事務室の方も声をかけていただく、といったことが、とても大事になってくるのではないかと思います。

佐藤●昔は友達同士で近しい関係があったので、「最近どうしてる?」というようなことが言えました。私のところにも「あいつ最近ちょっとおかしいんですよ」と言って来て、「じゃあちょっと会ってみようか」ということになっていたのが、今はそれぞれ個別になりすぎてお互いに踏み込んでいかないのです。そんなお互いに干渉しないでいるという状況から、いつの間にか引きこもってしまっている学生がいてもわからない状況を作ってしまったりということにつながってしまうように思います。学生同士のつながりが弱く、人間関係が濃密になっていないのです。昔から同志社は規模の大きい大学でしたが、かつてはその中である程度チェックできていたように思います。

真銅●今はあらゆることをメールですませてしまい、できるだけ会わないでおこうという学生も少なくないような気がします。

佐藤●メールは情報交換の道具としては

記録も残るし理解もしやすいからいいのですが、人間性の接触という面ではきわめてマイナスです。メールではいろんなことを装うことができてしまう。本当はしんどくても頑張っていると装うことができる。その意味で実際に学生同士が顔を合わせて何かをするという機会が非常に重要だと思います。

一歩踏み出す勇気を持って

真銅●大学としては学生同士が顔を合わせる場をたくさん準備していくことが必要かと思うのですが、学生支援センターでは実際にそういう取り組みが行われていますね。

大亦●現在、多くの課外プログラムを実施しています。そこでは人間関係のトレーニングという主旨であったり、自分自身を深く見つめ直してほしいという観点だったり、いずれも一人きりでは成り立たず、仲間とあるいは教職員と一緒に何かに取り組んで得られる成果というものが大きいです。人間関係を結ぶのが苦手ではあっても、決して力がないわけではなく、そういう場で体験をすると自分で気づいて変わります。仲間と共同でいろんなことを体験するプログラムがありますので、人と関わるのが苦手と思っている人はちょっと勇気を出してチャレンジしてほしいですね。

真銅●新入生にとっては、逆に今がチャンスだと思うのです。これまで高校でやってきたこととはまったく環境が変わりますので、今までうまくいかなかったこともうまくいくかもしれない。先生方にも、学生たちに広く門戸を開いて接していただくことをお願いしないといけない。最後に、学生たち自身がより良い学生生活を送るためにはこうしたらいい、こういうことを心がければいいということがありましたら教えてください。

車戸●一人で抱え込まず、いろんな相談窓口がありますから、まず相談に行ってほしい。窓口でなくても先生や友達に自分から発信するということに、一歩踏み出してもらえたらと思います。カウンセリングセンターの場合、飛び込みで来てもらってかまわないのですが、混んでくるとすぐに対応することが難しいので、電話で予約を取ってもらった方が確実です。面接は基本的に50分以内です。1回で終わることもあれば、継続して来られることもあります。ぜひ気軽にご連絡ください。

佐藤●生活が乱れてくると、例えば体内時計がうまく働かなくなるということもあります。一晩中起きていて好きな本を読み、明け方になって寝るというような生活が何となくかっこいいと思っている人もいるでしょう。そんな生活をしていると昼間起きているようでも、活動性が低下したり、ウツ気分が強くなったりしてさらに悪循環を起こす場合があります。規則正しい生活をすることによって精神的な問題が改善してゆく場合も多いのです。また夜眠れないで一晩中ネガティブな考えにとらわれていても、朝起きて友人と話をすると、「我ながら変な考えにとりつかれていたな」と自分の考えを変えることが出来たりします。そういった意味でもコミュニケーションするということから自分らしく生きるということができていくとも考えられるでしょう。

大亦●最近は五感をあまり使わない人が多いのではないでしょうか。頭の中の浅いイメージでこうだろうと思い込み、悩みの連鎖に引き込まれていってしまっているのです。そんなときはちょっと周りを見渡し、何かを聞いたり感じたり、おいしいものを食べることでもいい、五感を使うことでずいぶん楽になることがあるはずです。佐藤先生が言われた規則正しい生活というのも、やはり五感を正しく使うということにつながると思います。悩み出したなと思ったら、意識的に外からの刺激というものを感じてみてください。

真銅●これを読んだ学生が悩みを乗り越える手がかりとし、あらためて大学生活を充実したものにしていってくれることを期待しています。本日はどうもありがとうございました。

●カウンセリングセンター

京田辺校地（ラウンジ棟1階北側）
TEL：0774-65-7415
月～金　9時～11時30分、12時30分～17時

今出川校地（待辰館1階北側）
TEL：075-251-3275
月・水・金　9時～11時30分、12時30分～17時
火・木　9時～11時30分、12時30分～19時

文学部 哲学科
工藤 和男ゼミ

自由に考えることから 生きるための軸をつくる

工藤 和男【文学部教授】

人間とは、生きるとは…重く深い命題に真正面から取り組み、その本質を探究する哲学を、4年間の学びに選んだ学生たち。3年次から始まるゼミでは、その集大成である卒業論文作成に向けて、それぞれの考え方を集約し、少しずつひとつのテーマに絞り込んでいく。

工藤ゼミが研究の主題とするのは倫理学。哲学者の著書などを読み解き、規範や道徳的な根拠について考察することが主体だが、工藤和男教授の方針もあり、その学びの領域は幅広い。

「古典だけでなく、生命倫理や環境倫理など現代倫理にも及びます。古典の倫理学はアリストテレスやカントなどいわゆる学説的な研究が中心になりますが、このゼミではもっと現代的な問題、例えば脳死や臓器移植、あるいは環境、動物実験といった身近な問題、事象と結びつけ、同時に倫理学的な考えと照らし合わせながら考えていきます」

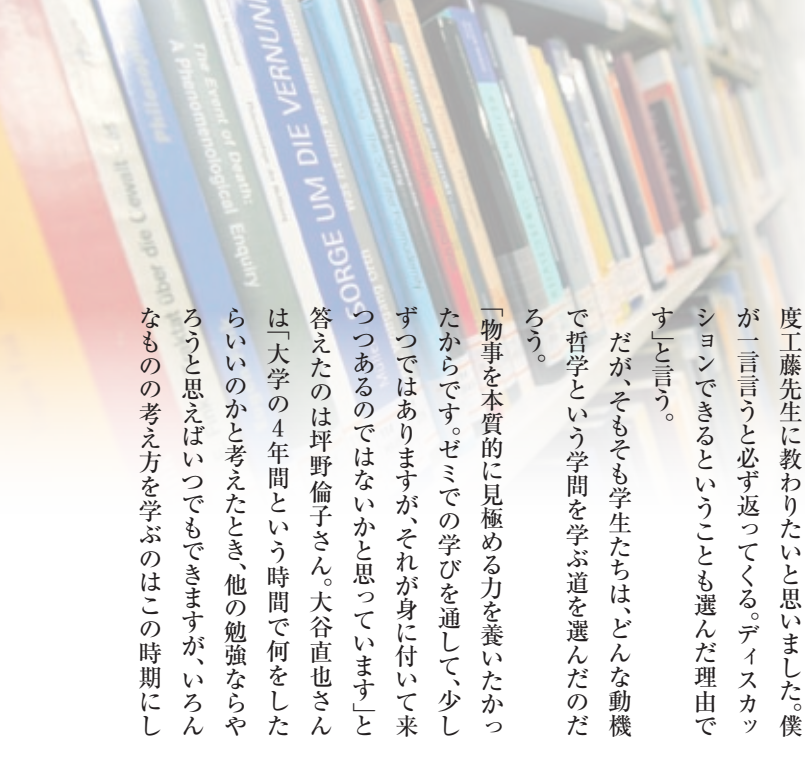
訪ねたのは、徳照館にある工藤教授の研究室。春学期の授業では、何冊かの文献を読み込み、そこに書かれている内容、著者の考え方などについて、一人ひとりが感想、考察を述べる形で進む。

「学生が自由にいろんな考え方を出してくれることが、私の理想です。本来演習は、それまで気づかなかった新しい考え方やものの見方などを、学生たち自身が発見することが重要ですから、自由闊達なディスカッションの中でそれが展開されていければと思っています」と工藤教授。

この日の文献は『倫理という力』(前田英樹著)。著者が指摘している問題点について教授が分析し、学生に意見を尋ねる。ある学生は、具体的に身近な家族の問題に結びつけて語った。侃々諤々の議論が展開される訳ではなく、教授とゼミ生たちの間で穏やかに対話が交わされていく。

秋学期からは、本格的な卒論指導に入る。全員が揃って研究室に集うこともなくなり、卒論を仕上げるための具体的な作業が教授の個別指導で行われる。

「卒論はひとつの科目ではなく、4年間哲学科に籍を置き、そこで自分が学んだことをすべて集約するという位置づけのもの



です。そういう意味では与えられた課題ではなく、自分が4年間で一番関心を持ったこと、一番取り組んだことをテーマに選ぶのが本質。ですから当ゼミでは、哲学、倫理学の範疇であれば、基本的に何をやってもいい。学生たちにも自由であることを強調しています」。

学生もそんな自由な空気に惹かれて、工藤ゼミを選んでいるようだ。

1年次の人文演習で工藤教授のクラスに所属した植村実友里さんは「そのときに自由に自分のやりたいことをやらせてもらえたので。興味のあった倫理学が学べて、幅広く何でもできるというのが一番の魅力でした」。同じく山田健一さんも「1年次の授業が純粋に面白かったので、もう一度工藤先生に教わりたいと思いました。僕が一言言うと必ず返ってくる。ディスカッションできるということも選んだ理由です」と言う。

だが、そもそも学生たちは、どんな動機で哲学という学問を学ぶ道を選んだのだろう。

「物事を本質的に見極める力を養いたかったからです。ゼミでの学びを通して、少しずつではありますが、それが身に付いて来つつあるのではないかと思っています」と答えたのは坪野倫子さん。大谷直也さんは「大学の4年間という時間で何をしたらいいのかと考えたとき、他の勉強ならやろうと思えばいつでもできますが、いろんなものの考え方を学ぶのはこの時期にしかできないと思って選びました」と語る。

その哲学の魅力について、堀池宏治さんは「人それぞれに考え方があり答えがあります。みんなが同じ答えを出さないといけないことはないと思うのです。いろんな考えがあって意見を出し合うことが哲学なのではないか。そんな多様さがいい」。西森敦さんは「わかっているようなわかっていないような混沌とした状況を見つめ直し、やっぱりそうか、いやそうじゃなかったということがわかる。新しい発見もあるし、当たり前に言われていることが、なぜそれが大事なのか理解できるのも面白いです」と話した。

哲学を学んだ学生たちの卒業後の進路も気になる。工藤教授によると、「私の学生の頃は、哲学を学んだ後は教員か公務員になるしかないという雰囲気でしたが、1990年代くらいから大きく様変わりしています。大学時代には哲学で人生の考え方を学び、仕事を選ぶこととはまったく別、ある意味で割り切りといいますか、4年間でそういう勉強ができれば後はどんな職業でも選んでいくという風に変わって来ました」。

その意味でひとつの示唆を与えるのは、植村さんのケースだ。「卒業後は専門学校へ行って動物看護師になりたい」のだと言う。「動物病院で獣医の先生の補佐をする仕事です。『大学へ行ってまでする仕事じゃない』『大学の4年間が無駄になる』とも言われるのですが、自分のやりたいことがあやふやなままで適当な会社に就職したくはなかったのです。やりたいことが大学の4年間で見つかったということは、この4年間は私にとって決して無駄な時間ではなかったと思います」。その進路を決めた下地には、卒論のテーマにも選んだ動物の権利・尊厳という問題がある。

4年間で真摯に自分と向き合い、そこから長い人生を歩んでいくための確固とした軸を見いだす。それが哲学を選択した学生の学びの本質なのかもしれない。

高等教育・学生研究センター

大学教育を“科学”し教育改善を主導する研究・実践拠点

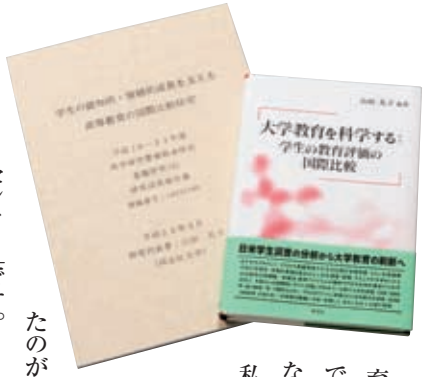
山田 礼子【社会学部教授】

2004年から実施、蓄積してきた学生調査研究の基盤をさらに発展させ、学生の成長と成果に関する理論研究を充実させるとともに、大学の教育改善につなげるための実践研究を行うことを目的として、2008年11月、同志社大学に「高等教育・学生研究センター」が設立された。本学をはじめとする国公私立4大学による大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムの拠点としての機能をも併せ持つ同センターの役割や今後の展望について、同志社大学社会学部教授、山田礼子センター長に伺った。

現在、大学には教育理念と学生の成長を実現する学習の場として、学士課程の充実が強く求められています。しかし、学生の成長の測定、その成果と学士教育課程の関係性についての研究蓄積がわが国では不足しており、その大きな原因は継続的学生調査の開発と理論構築の遅れにありました。

一方、欧米諸国、とりわけアメリカでは早くから学生調査が継続的に実施され、そうした調査の結果をベースにして高等教育の教育効果の測定研究、学生研究の蓄積が行われ、1966年に開発されたカレッジ・インパクト理論など学生の成長に関する理論的研究が進んでいます。

こうした状況に鑑み、私たちは2004年から全国の学生を対象にした大規模な学生調査を継続的に行ってきました。調査対象となった学生は延べ5万4000人、参加大学は延べ約250大学（学部）にのぼります。そこでは学生の教育評価を国際的に比較できるようにすることが目的のひとつでした。アメリカで開発されたカレッジ・インパクト理論が日本の中でも通用するものなのかどうかを検証し、日本版の理論として構築する。その成果をまとめたものが『大学教育を科学する―学生の教



育評価の国際比較』です。こうした継続的な研究を行ったのは私たちが初めてで、その基礎研究を元に、さらに次の応用段階へと発展させていくために設置したのが「高等教育・学生研究センター」です。

当センターの特徴は、第一に学生調査を継続的に実施していることです。こうした機能を持つセンターは、本学の研究機関が唯一です。例えば東京大学のグループも同種の調査を行っていますが、私たちのように継続して行われているわけではありません。長期的に見た場合に学生がどう変わってきたか、10年前の学生と今の学生がどう違うのか、時系列で把握していく。今の学生の状況だけではなく、何年かの流れの中で学生たちがどういう特徴を持ち、それがどう変わってきたかを分析し理論化するためには、継続的に調査を行っていくことが必要なのです。

基礎研究の段階から私たちが取り組んできたのは、大学教育を科学するということです。これまで多くの大学では、客観的なデータを元に現状を把握し、それを教育改善に活かすということを行ってきませんでした。大学は先生が話をするのを学生が聞くという形で成り立っており、先生たちも今の学生はこうだということを主観で捉えていました。そうではなく、臨床の経験が重用されていた時代からデータ重視に変わってきた医学の世界と同様、データで学生の学習行動や生活行動を把握し、それを教育改善に活かしていかなければならない。すなわち科学的なデータによって大学教育を変えていく。私たちの研究活動ではその基盤を作ることを意図してきましたし、今の大学改革の流れのなかで、ある程度評価されるようになったのではないかと思っています。

この研究への取り組みは10年のスパンで考えていますから、これまでの6年の基盤構築を元に、今後の4年間は他の大学の指標となるものを作っていくことが目標になります。日本におけるカレッジ・インパクト理論を、当センターがリーダーとなって構築していく。どこの大学にも十分な分析能力があるとは限りませんから、これまでの研究で蓄積してきたデータベースにアクセスすれば、自分の大学が特定のグループの中でどういう位置づけにあるのか、どんな特徴を持っているのか、すぐにわかるような仕組みを作っていきたいと考えています。

さらにもうひとつ、グローバル化に対応していくことも目標です。残念ながら今、日本の学生研究は海外での評価が決して高くありません。それは理論に裏付けされた蓄積とその発表が少ないからです。蓄積がないから広がりもない。個々にはすぐれた研究者がいたとしても、点でしかなく大きな面として広がっていません。ですから当センターを中心に広がりを作っていく。知見を発表し、ジャーナルに投稿し、研究者同士を結びつけて共同研究を進めていくためのセンターにしたいと考えています。

そこではアジアと日本という視点も重要です。韓国や中国を筆頭にアジア諸国は今、大学教育に非常に力を入れていますから、日本はどんどん後れを取っています。アジアの学生と競争していくうえで、日本の学生はどういう能力に優れているのか、あるいは劣っているのかを見極めていく必要があります。

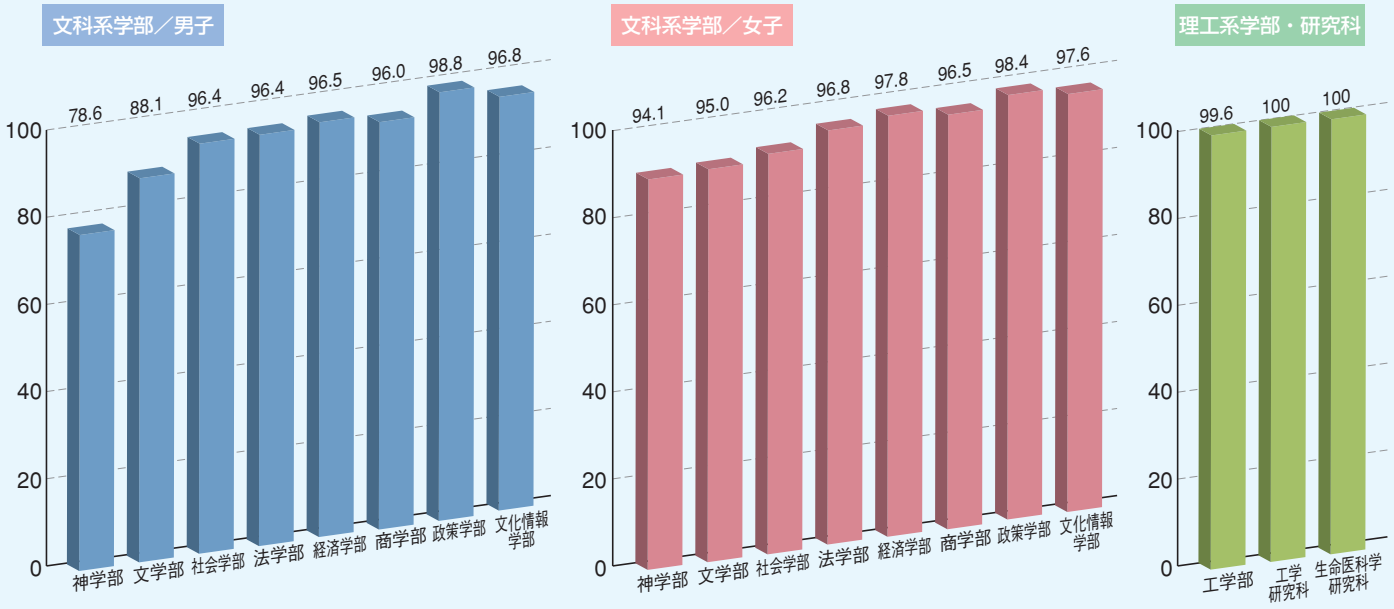
また、当センターについて説明する上で忘れるわけにいかないのは、研究センターとしての機能と同時にもうひとつの側面を持っていることです。２００８年から文部科学省が主導して始まった「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」。本学は２００９年６月から当センターを受け皿として、北海道大学、大阪府立大学、甲南大学の３大学と連携し、学生調査を軸とした客観的データに基づいて、教育の現状を評価するＩＲ（Institutional Research）機能の充実、ＩＲを活用した連携大学間での相互評価、その評価結果を学生の学習時間の確保や単位制度の実質化に結びつける教育環境の整備を目指しています。そこでは私たちが過去6年間に行ってきた研究の成果が活かされており、センターの研究活動と切り離せない関係にあります。これまでの研究の蓄積を発展させ、その成果を外部の競争的資金獲得のための活動にも活かしていく。その意味では新しいタイプの研究センターであると言えるでしょう。

データでみる同大生の 2009年度就職戦線

2009年度の就職状況は、厳しい就職環境にもかかわらず就職率96.6%と高い数字となりました。その一方で、社会のニーズが多様化する中、企業は今後ますます、外国語運用能力、情報活用能力、人間関係を結ぶコミュニケーション能力、さらには問題発見解決能力など、自ら考え行動し成果をあげることができる潜在能力を持った自立した人材を求めています。このような変化の中で、みなさん自身がより高いキャリアを形成するためには、目的を持ち勉学やクラブ活動に充実した大学生活を送ることや、**インターンシップ(注1)**など学外の体験学習を通じて社会の動きを持つことが大切になります。

■就　職　率

就職率＝就職者数／就職希望者数



■主な就職先と人数

会社名と人数

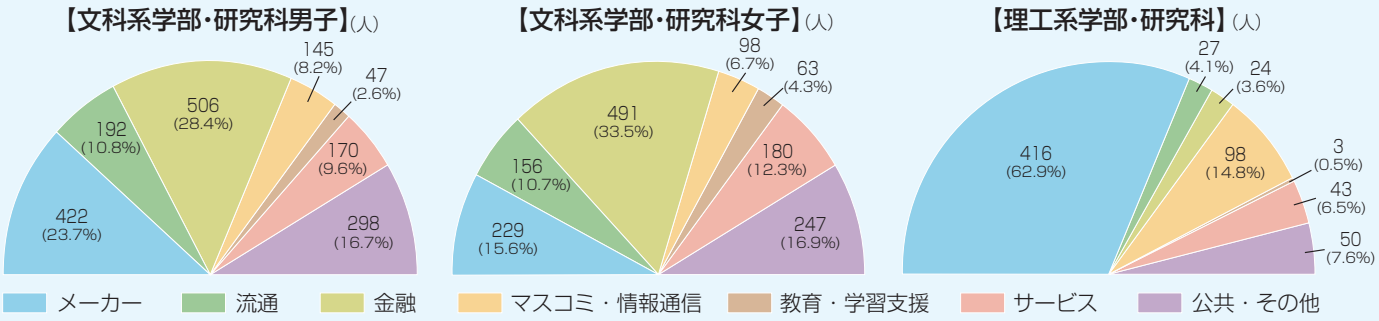
文　系

株式会社京都銀行	61	株式会社大垣共立銀行	12
日本生命保険相互会社	44	株式会社百五銀行	12
株式会社りそなホールディングス	42	京都府	12
みずほフィナンシャルグループ	41	郵便局株式会社	12
株式会社三井住友銀行	36	京都市	11
株式会社南都銀行	33	アステラス製薬株式会社	11
国家公務員Ⅱ種	31	楽天株式会社	11
京都中央信用金庫	29	株式会社北陸銀行	11
株式会社三菱東京ＵＦＪ銀行	28	日興コーディアル証券株式会社	10
株式会社滋賀銀行	28	パナソニック株式会社	10
株式会社かんぽ生命保険	25	株式会社広島銀行	10
三井住友海上火災保険株式会社	23	株式会社静岡銀行	10
東京海上日動火災保険株式会社	22	株式会社紀陽銀行	10
国税専門官	21	第一生命保険相互会社	9
三菱電機株式会社	20	大同生命保険株式会社	9
株式会社ゆうちょ銀行	20	武田薬品工業株式会社	9
株式会社損害保険ジャパン	17	相互印刷紙器株式会社	9
明治安田生命保険相互会社	17	株式会社ニトリ	9
住友生命保険相互会社	17	積水ハウス株式会社	8
株式会社池田泉州ホールディングス	16	日本基督教団	8
野村證券株式会社	15	西日本旅客鉄道株式会社	8
住友信託銀行株式会社	15	三菱ＵＦＪインフォメーションテクノロジー株式会社	8
日本電信電話	15	郵便事業株式会社	8
あいおい損害保険株式会社	14		
株式会社商工組合中央金庫	13		
裁判所事務官Ⅱ種	13		
株式会社大和証券グループ本社	12		
日本興亜損害保険株式会社	12		
全日本空輸株式会社	12		

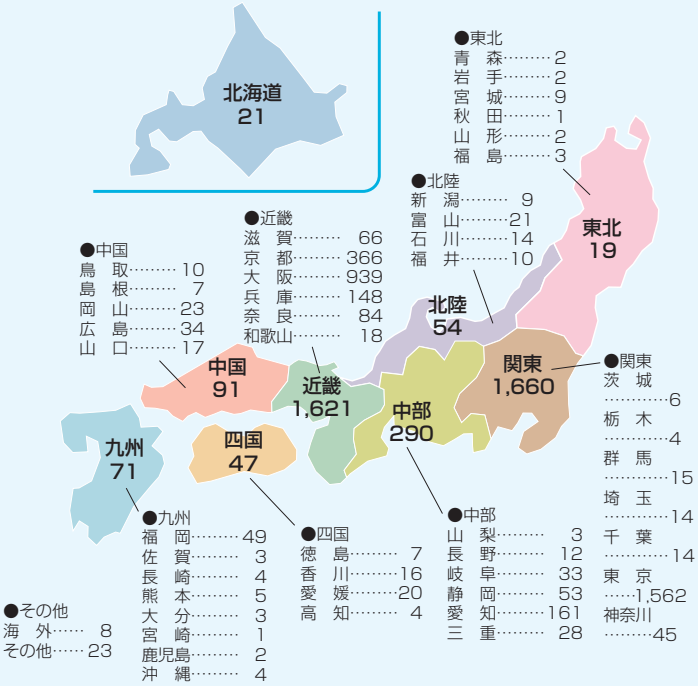
理　工　系

株式会社野村総合研究所	14	日立建機株式会社	4
日本電信電話	10	株式会社村田製作所	3
ダイキン工業株式会社	10	富士通株式会社	3
株式会社日立製作所	9	スズキ株式会社	3
株式会社東芝	9	マツダ株式会社	3
ローム株式会社	8	株式会社堀場製作所	3
三菱重工業株式会社	8	株式会社小松製作所	3
株式会社デンソー	7	ＫＤＤＩ株式会社	3
三菱電機株式会社	7	富士ゼロックス株式会社	3
株式会社エヌ・ティ・ティ・データ	7	国家公務員Ⅱ種	3
本田技研工業株式会社	6	セイコーエプソン株式会社	3
ダイハツ工業株式会社	6	日立造船株式会社	3
ＴＩＳ株式会社	6	三菱電機エンジニアリング株式会社	3
中部電力株式会社	6	株式会社ＩＨＩ	3
ＴＯＴＯ株式会社	6	株式会社きんでん	3
トヨタ自動車株式会社	5	株式会社ジーエス・ユアサ	
パナソニック株式会社	5	コーポレーション　グループ	3
パナソニック電工株式会社	5	新日本製鐵株式会社	3
京セラミタ株式会社	5	古河ＡＳ株式会社	3
ヤンマー株式会社	5	光洋サーモシステム株式会社	3
株式会社豊田自動織機	4	株式会社南都銀行	3
シャープ株式会社	4	ソフトバンク株式会社	3
関西電力株式会社	4	株式会社サイゼリヤ	3
旭化成グループ	4	関電システムソリューションズ株式会社	3
任天堂株式会社	4	シスメックス株式会社	3
エヌ・ティ・ティ・コムウェア株式会社	4	株式会社サーモテック	3
旭硝子株式会社	4		
花王株式会社	4		
レンゴー株式会社	4		

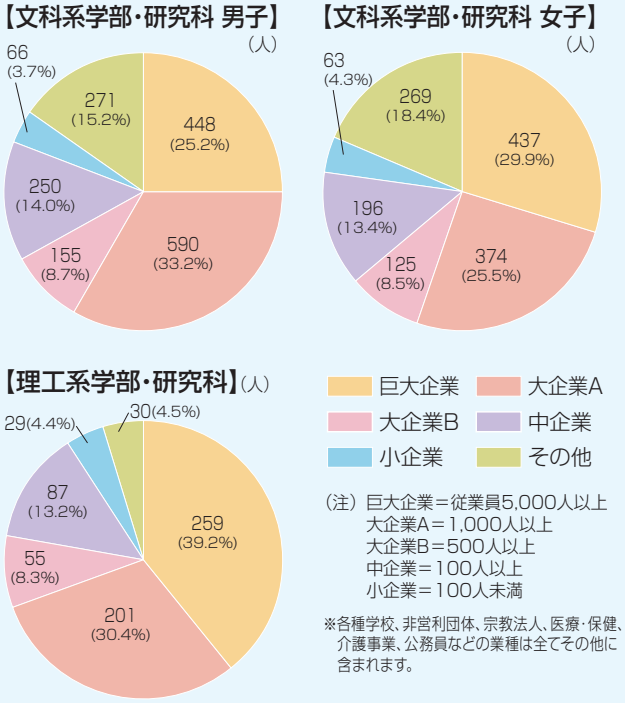
■業種別内定状況



■地区別内定状況 (人)



■従業員規模別内定状況



(注) 巨大企業＝従業員5,000人以上
大企業A＝1,000人以上
大企業B＝500人以上
中企業＝100人以上
小企業＝100人未満

※各種学校、非営利団体、宗教法人、医療・保健、介護事業、公務員などの業種は全てその他に含まれます。

※データは2009年度確定数

(注1)インターンシップ

インターンシップは、学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うことです。本学では正課科目「キャリア形成とインターンシップ」を2クラス開講しています。学生が大学で学んだ社会の諸課題と、その問題解決に向けての考え方、専門知識・理論との統合をはかり、その経験を通じて、より高い学習意欲を喚起しています。同時に、仕事、職業に対する興味・関心を高め、自らの適性や適職を考える大きな契機となることを願っています。その他にも企業主導型(公募制)のインターンシップもあり、キャリアセンターホームページ「e-career」(http://career.doshisha.ac.jp/campusweb/top.do)でその一部を紹介していますので参考にしてください。

1日インターンシップ

1・2年次生向けに1日企業訪問する課外講座を実施しています。事前研究、グループワーク、企業訪問、卒業生との交流セミナー、事後レポート、成果報告会などを行う、トータルなキャリア形成プログラムです。働くことに対して学生の抱いているイメージと現実とのギャップを埋めるとともに、業界や社会の現状を認識し、学生生活における目的意識や知的好奇心の向上を図る絶好の機会となっています。

参加者の感想

就職活動前に仕事の現場を見ようと思い、参加しました。マスコミ・教育業界を見て、人々に勇気や感動を与える、アナウンサーや製作の仕事に興味が湧きました。これから自分の進みたい道を探すきっかけとして、よい経験ができました。

人事の方から、「好きなこと」や「やりたいこと」を探す大切さを教わりました。今は、夢を見つけた後も実現に向かって努力し、挑戦したいと考えています。こうした積極性は、インターンシップ後に生まれたものですね。

(東京一日インターンシップ　法学部　2年次生)

日本の就職活動について、具体的なイメージを掴むために参加しました。大阪国際空港で、利用者としては見ることができない空港の裏側まで見学させてもらい、華やかなイメージとは違い、複雑な仕事がたくさんあると知りました。

参加したことで、就職への考え方が変わりました。今までは、「日本で就職する」ことをゴールだと思っていましたが、就職は一つの通過点だと気づいたのです。これからは積極的に学ぶ機会や人と交流する機会を掴み、足りない部分を補おうと考えています。

(関西一日インターンシップ　社会学部　2年次生)

OBとの懇親会で、「これからは企業も個人も海外で働くことを視野に入れないと、生き残れない」と言われたことが印象に残っています。今までは海外勤務なんて考えもしませんでしたが、より多くのことを学べると知り、選択の一つとして考えるようになりました。

インターンシップで刺激を受けて、就職へのイメージが一転しました。今まで仕事とはただ「生活のためにするもの」だと考えていたのですが、本人の意識次第でとても楽しいものになると気づきました。それから就職することが楽しみになり、自分から積極的に情報収集をし、行動したいと思うようになりました。

(上海インターンシップ　商学部　3年次生)

2010年度 大学予算について

財務部 経理課

グローバル化する知識基盤社会や学習社会の拡がりを背景に、大学は、学生や社会のニーズを的確に捉え、国際的通用性を十分に備えた、より質の高い教育研究の実現が求められています。本学は、これまでの教育研究の成果を活かしつつ、学士課程教育および大学院教育を通じて、未来の社会を支える人物を育成する重要な役割を果たし続けなければなりません。

2010年度は、今出川校地にグローバル・スタディーズ研究科、京田辺校地にスポーツ健康科学研究科を新たに開設しました。また、それぞれの校地の特色を明確に位置づけたキャンパス再編計画に従い、今出川校地の再整備に着手します。さらに、2011年度に予定している京田辺校地でのグローバル・コミュニケーション学部の開設に向けた準備を進めます。

また、グローバル30構想の下での国際化推進にむけた制度・環境の構築や、情報環境のリプレースをはじめとする、教育の質保証を支える教育研究環境の整備に積極的に取り組みます。

2010年度予算は、帰属収入を安定的に確保し、優先的課題への必要かつ効果的な措置を行うとともに、既存事業の見直しなど経費抑制を徹底的に行うことで、計画性を重視し、限られた財源を効率的に配分することを大原則に編成しています。

収入の部

学生生徒等納付金は、学費改定による増収や新設学部に係る収納があるものの、在籍学生数合計は前年度と比較して減少するため、前年度に対して3億6千万円減の288億3千万円を計上しています。これ以外の収入については、確実に収入が見込めるもののみを計上しているため（主な増減理由は表1に注記）、**帰属収入合計**は**366億2千万円**となり、前年度予算に対して22億8千万円の減収となっています。

第2号基本金取崩額は大規模な建設工事や研究装置等の取得資金に充当するもので、2010年度は今出川校地整備事業への充当額38億3千万円および研究装置の取得資金6千万円を計上しています。

当期固定資産除却額17億6千万円は、固定資産（機器備品）の償却期間完了によるものです。

特定支出準備金取崩額の内訳は、岩倉北東校地への施設建設に係る準備金の取崩額2億5千万円等です。

収入の部合計は**429億4千万円**となり、前年度予算に対して8億2千万円の増加となります。

支出の部

人件費は、教員充実計画および学部設置に伴う増員分の経費、定期昇給の必要額などがあるものの、退職給与引当金繰入額の減少に伴い、前年度に対して2億2千万円減の193億2千万円を計上しています。

事業費は、表1では教育研究経費（減価償却額を除く）、管理経費（同左）、施設関係支出、設備関係支出および予備費に仕訳されていますが、全体では対前年度比41億3千万円増の総額213億1千万円を計上しています（事業別予算額は表2参照）。**経常的経費**については前年度予算を基準として計上し、**管理経費**については一部の重点項目を除いて極力節減を図りますが、**建設事業**として、今出川校地整備事業のほか、多々羅キャンパスの整備、同志社国際学院（初等部・国際部）建設などの大規模な事業を行うため、前年度と比較して大幅に増加しています。

徴収不能引当金繰入額1億2千万円は、学費および学資貸付金の回収不能額に対する引当金に繰り入れる額です。

繰入金には、法人内諸学校への資金調達額8億円および岩倉北東校地への施設建設費用2億5千万円などを計上しています。

第2号基本金組入額は、大学今出川校地整備資金**20億円**で、組入計画に基づくものです。

特定支出準備金繰入額の内訳は、COE形成基金への繰入額2億円などです。

支出の部合計は**481億8千万円**となり、前年度予算に対して2億2千万円の減少となります。

収支差額の部

収入の部合計から支出の部合計を差し引いた**当年度消費収支差額**は、**52億4千万円**の消費支出超過となります。消費支出準備金を取崩すことにより、最終的には14億8千万円の消費支出超過となります。

（本文中の金額については1千万円未満を四捨五入しています）

主な新規事業

（単位：千円）

教育研究条件の充実	
外国語能力テスト等の実施	13,340
高大連携教育事業の実施	2,380
司法研究科の教育支援（アカデミック・アドバイザー制度充実、判例法令DB整備他）	61,260
社会福祉教育・研究支援センター事業の推進（社会学部・社会学研究科）	2,300
企業法務プロフェッショナルの育成（法学部・法学研究科）	2,490
入学前準備教育・事前学習プログラムの実施（商学部・商学研究科）	7,000
大学院生の英語能力向上への支援（理工学部・工学研究科）	2,400
英語学修支援システムの導入（生命医科学部・生命医科学研究科）	3,440
自動講義収録システムの増強	9,590
先端的教育研究拠点の基盤整備	68,600
環境シンポジウムの開催	1,240

企画広報活動・管理運営	
新設学部等の広報	12,340
既存学部・大学院等の広報充実	34,630
『マンガで読む新島襄』後編の制作	23,170
その他企画広報事業の充実（ビジネス誌による広報企画など）	30,320
TV会議システムの更新	16,480
入試実施体制の充実	3,600
教職員向けホームページのリニューアル	1,810
経営戦略懇談会の実施	950

教育研究環境の整備	
神学館　礼拝堂パイプオルガンの整備	2,310
機械系製図室AV設備の更新	7,110
徳照館　書庫の整備（文学部・文学研究科）	2,880
夢告館　文献室の整備（文化情報学部・文化情報学研究科）	2,220
教育活動用学外施設の賃借（総合政策科学研究科）	5,000
寒梅館　講師控室等の整備（司法研究科）	1,850
教室および貸出用マルチメディア機器の整備・更新	92,120
教室音響設備の整備・更新	42,350
メディア工房スタジオの改修	11,550
教育研究支援システムのリプレース	183,860
マルチメディアラウンジのリプレース	37,000
マイク調整室業務の増強	14,440
ネットワークシステムのリプレース	161,850
ネットワーク利用認証環境の改善	7,880
教務事務環境の整備（教務システム修正等）	39,040
海外拠点の設置・運営	23,500
今出川図書館　1Fフロアの改修	6,430
ラーネッド記念図書館　サービス業務の増強	58,050
学術情報システムのリプレース	91,270
社史資料センター資料室　所蔵資料の虫菌害調査	1,470

学生生活支援の充実	
文化系公認団体の活動支援強化	3,000
障がい学生支援室活動の充実	3,190
寒梅館ホール音響機器・映像機器の充実	6,920
キリスト教文化センター　新規プログラムの実施	2,890

施設設備の整備および維持管理、省エネルギー化	
今出川校地施設設備の更新（継志館改修、明徳館空調機更新、図書館トイレ改修）	89,160
京田辺校地施設のライフサイクル修繕（デイヴィス記念館照明更新、教室棟各所および保健センタートイレ改修、体育ハウス2改修）	81,500
省エネ関連コンサルタント費用	15,750
特定化学物質等を取扱う実験室等の環境測定業務委託	5,600
今出川校地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施	69,370

建設事業（本年度支払予定額）	
今出川校地整備事業	4,748,170
多々羅キャンパスの整備	221,000
防災校地管理システムの更新（今出川）	30,500
光塩館受電設備の更新（今出川）	49,800
致遠館屋根瓦の取替（今出川）	23,730
継志館の整備（今出川）	18,660
寧静館昇降機の改修（今出川）	10,440
香柏館および自然系実験実習棟の整備（京田辺）	119,000
多目的ホール外装の改修（京田辺）	48,000
体育施設の整備（陸上競技器具庫、更衣室空調など）（京田辺）	43,000
京田辺別館昇降機の改修（京田辺）	18,700
嗣業館自動扉の増設（京田辺）	10,000
高圧ケーブルの更新（京田辺）	8,000
同志社国際学院の建設	2,548,900
リトリートセンターテントサイト周辺雨水排水対策	18,100

■2010年度収支予算書（表1）

2010年4月1日から2011年3月31日まで

（単位：千円）

収入の部				
科目	予算	前年度予算	増減	主な内訳または増減理由
学生生徒等納付金	28,834,840	29,192,610	△357,770	在籍学生数の減少見込みによる減収など
手数料	1,681,300	1,562,500	118,800	入学検定料等
寄付金	128,000	1,626,630	△ 1,498,630	寄付教育研究プロジェクト研究活動あて寄付金等、収納が確実なもののみ計上
補助金	3,630,880	3,998,980	△ 368,100	経常費補助金、大学改革推進等補助金等、収納が確実なもののみ計上
資産運用収入	811,060	772,510	38,550	
資産売却差額	0	0	0	
事業収入	345,400	617,300	△ 271,900	企業からの研究受託に係る受託事業収入等、収納が確実なもののみ計上
雑収入	654,760	726,730	△ 71,970	退職金財団交付金収入等、収納が確実なもののみ計上
繰出金	375,550	264,070	111,480	法人内諸学校からの資金調達額の返済額等
分担金	155,350	132,670	22,680	法人内諸学校からの法人業務に係る分担金
帰属収入合計	(36,617,140)	(38,894,000)	(△ 2,276,860)	
第2号基本金取崩額	3,890,000	530,000	3,360,000	大学今出川校地整備資金等の取崩額
当期固定資産除却額	1,758,460	1,417,530	340,930	2000年度取得固定資産の一括除却等
借入金等収入	0	0	0	
当期末未払金	0	0	0	
基本金過年度組入額、未組入額計	(5,648,460)	(1,947,530)	(3,700,930)	
特定支出準備金取崩額	678,720	1,278,780	△ 600,060	岩倉北東校地への施設建設に係る準備金の取崩額等
収入の部合計	[42,944,320]	[42,120,310]	[824,010]	

支出の部				
科目	予算	前年度予算	増減	主な内訳または増減理由
人件費	19,321,780	19,538,590	△ 216,810	退職給与引当金繰入額の減少に伴う減額
教育研究経費	14,340,090	14,086,030	254,060	主な新規事業参照
消耗品費他	11,073,020	10,858,750	214,270	
減価償却額	3,267,070	3,227,280	39,790	
管理経費	1,515,660	1,561,880	△ 46,220	主な新規事業参照
消耗品費他	1,365,400	1,414,370	△ 48,970	
減価償却額	150,260	147,510	2,750	
借入金等利息	19,720	23,250	△ 3,530	借入金残高の減少
資産処分差額	262,060	15,130	246,930	
徴収不能引当金繰入額	122,630	45,950	76,680	
繰入金	1,100,000	3,498,700	△ 2,398,700	法人内諸学校への資金調達等
予備費	230,000	110,000	120,000	経理規程（経常勘定における帰属収入の7/1000以上を計上）に基づく
消費支出合計	(36,911,940)	(38,879,530)	(△ 1,967,590)	
施設関係支出	6,905,490	2,676,910	4,228,580	主な新規事業参照
設備関係支出	1,739,620	2,118,830	△ 379,210	主な新規事業参照
借入金等返済支出	206,080	183,580	22,500	
前期末未払金	5,180	72,590	△ 67,410	
第2号基本金組入額	2,000,000	4,000,000	△ 2,000,000	
第3号基本金組入額	0	2,000	△ 2,000	
第4号基本金組入額	203,600	83,100	120,500	学校法人会計基準に定める「恒常的に保持すべき資金の額」との差額を組入
基本金要組入額、当年度組入額計	(11,059,970)	(9,137,010)	(1,922,960)	
特定支出準備金繰入額	211,740	388,170	△ 176,430	
支出の部合計	[48,183,650]	[48,404,710]	[△ 221,060]	

収支差額の部			
科目	予算	前年度予算	増減
当年度消費収支差額	(△ 5,239,330)	(△ 6,284,400)	—
消費支出準備金繰入額	0	0	—
消費支出準備金取崩額	3,757,780	3,373,910	—
繰入取崩後消費収支差額	(△ 1,481,550)	(△ 2,910,490)	—
前年度繰越消費収支差額	[△ 30,377,680]	[△ 27,467,190]	—
翌年度繰越消費収支差額	[△ 31,859,230]	[△ 30,377,680]	—

■事業別予算書（表2）

（単位：千円）

事業別予算総括表	
事業項目	予算
人件費	(19,321,780)
事業費	(21,313,530)
基本金・準備金	(2,420,520)
財務費	(1,710,490)
減価償却額	(3,417,330)
支出の部合計	[48,183,650]

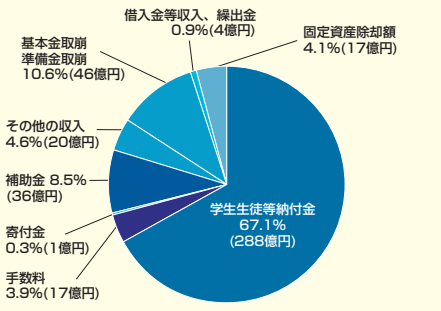
事業費内訳	
事業項目	予算
教育研究費	(7,677,130)
研究費	2,056,550
研究所経費	104,860
実験実習費	650,870
教育研究援助費	1,165,770
情報処理教育研究費	1,291,950
学術情報整備充実費	603,910
国際交流関係費	464,050
入学試験経費	667,350
教学事務運営費	671,820
学生経費	(1,086,050)
奨学援助費	478,850
学生生活助育費	500,670
学寮費	106,530
施設・設備整備充実費	(712,470)
施設・設備等整備充実費	712,470
施設・設備維持管理費	(1,613,000)
施設・設備等維持管理費	1,613,000
維持運営費	(920,750)
通信費・光熱水費	920,750
一般管理費	(719,740)
一般管理費	557,120
教職員福利厚生費	162,620
特別事業費（建設事業等）	(5,322,100)
新設学部・研究科関連経費	(2,687,740)
法人経費	(344,550)
予備費	(230,000)
事業費小計	[21,313,530]

基本金・準備金内訳	
事業項目	予算
第2号基本金組入額	(2,000,000)
大学今出川校地整備資金	2,000,000
第3号基本金組入額	(0)
第4号基本金組入額	(203,600)
翌年度基本金組入額繰延額	(0)
前期末未払金	(5,180)
特定支出準備金繰入額	(211,740)
基本金・準備金小計	[2,420,520]

財務費内訳	
事業項目	予算
借入金等返済支出	(206,080)
借入金等利息支出	(19,720)
資産処分差額	(262,060)
徴収不能引当金繰入額	(122,630)
繰入金	(1,100,000)
財務費小計	[1,710,490]

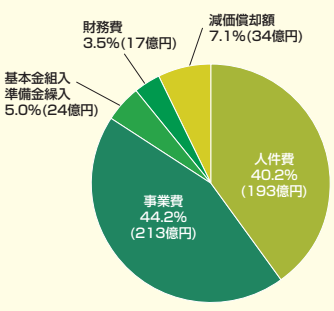
■収支構成図

収入の部



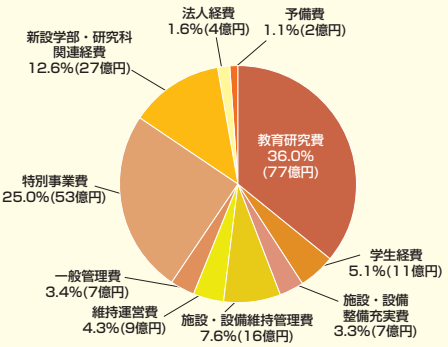
収入の部合計 429億円（うち帰属収入 366億円）

支出の部



支出の部合計 481億円（うち消費支出 369億円）

事業費内訳



事業費内訳計 213億円（うち教育研究費 77億円）